

アクティブラーニングとしての模擬授業

山崎 宣次¹⁾

Trial Lesson as Active Learning

Senji YAMAZAKI

教員養成課程における教科教育法において、具体的な授業場面を想定した授業設計をするためにも模擬授業は大切で、多くの教員養成大学で実施されている。しかし、履修学生の人数により、必ずしも全員が模擬授業の教師役をしているとは限らない。また、大学の授業において能動的な学修としてアクティブラーニングの重要性も叫ばれている。そこで、教員養成課程の教科教育法において、学生主体で対話的で深い学びになるような模擬授業に取り組んだ。また、ICT 機器としての電子黒板を効果的に模擬授業に活用することを必修にすることで、学生自身も電子黒板の必要性を感じることができた。さらに、模擬授業の動画視聴から最終レポートを書かせることで、教師役学生のリフレクションに効果的であることも分かった。

キーワード：小学校、模擬授業、アクティブラーニング、教員養成

1. はじめに

文部科学省の教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会による「教職課程コアカリキュラム(案)」(2017)によると、図1のように各教科の指導法において、(2) 当該教科の指導方法と授業設計の一般目標で「基礎的な学習指導理論を理解し、具体的な授業場面を想定した授業設計を行う方法を身に付ける。」としている。また、到達目標では「4) 模擬授業の実施とその振り返りを通して、授業改善の視点を身に付けている。」とし、具体的な授業場面を想定した模擬授業を実施し、その振り返りによって授業改善の視点を身につけさせることを求めている。そのため、教科教育法において実践的指導力を学生に身につけさせるために模擬授業を取り入れる大学は多い。

また、文部科学省の「平成26年度の大学における教育内容等の改革状況について(概要)」の調査によると学部段階において、能動的学修(アクティブ・ラーニング)を効果的にカリキュラムに組み込むための検討を行っている大学は66%(2015年度実

施)であり、年々増えている。

各教科の指導法(情報機器及び教材の活用を含む。)	
全体目標:	当該教科における教育目標、育成を目指す資質・能力を理解し、学習指導要領に示された当該教科の学習内容について背景となる学問領域と関連させて理解を深めるとともに、様々な学習指導理論を踏まえて具体的な授業場面を想定した授業設計を行う方法を身に付ける。
(1) 当該教科の目標及び内容	
一般目標:	学習指導要領に示された当該教科の目標や内容を理解する。
到達目標:	1) 学習指導要領における当該教科の目標及び主な内容並びに全体構造を理解している。 2) 個別の学習内容について指導上の留意点を理解している。 3) 当該教科の学習評価の考え方を理解している。 4) 当該教科と背景となる学問領域との関係を理解し、教材研究に活用することができる。 5) 発展的な学習内容について探究し、学習指導への位置付けを考察することができる。 ※中学校教諭及び高等学校教諭
(2) 当該教科の指導方法と授業設計	
一般目標:	基礎的な学習指導理論を理解し、具体的な授業場面を想定した授業設計を行う方法を身に付ける。
到達目標:	1) 子供の認識・思考、学力等の実態を視野に入れた授業設計の重要性を理解している。 2) 当該教科の特性に応じた情報機器及び教材の効果的な活用方法を理解し、授業設計に活用することができる。 3) 学習指導案の構成を理解し、具体的な授業を想定した授業設計と学習指導案を作成することができる。 4) 模擬授業の実施とその振り返りを通して、授業改善の視点を身に付けている。 5) 当該教科における実践研究の動向を知り、授業設計の向上に取り組むことができる。 ※中学校教諭及び高等学校教諭

図1 教職課程コアカリキュラム(案) 各教科の指導法

1) 教育学部子ども教育学科

そこで、「理科教育法」におけるアクティブラーニングとしての模擬授業の実践を報告する。

2. 先行実践事例と課題

教科教育法における模擬授業は様々な大学で実施されている。最近の先行研究としては、中山ら(2017)は、小学校理科の模擬授業のデザイン原則を示した後に班ごとに模擬授業を実施し、22項目にわたる授業評価項目を、Web評価システムを使って相互評価させ、事後の協議も学生主体にすることで、学生による授業評価において満足度も高まり、アクティブラーニングとしての模擬授業の形態を提案している。特に、模擬授業を含む教育法の授業は、教師役班による45分間の模擬授業(他の学生は児童役)、その後、25分間ほどのWebによる授業評価と班ごとの協議、10分間の班代表によるコメント、10分程度の大学教員によるコメントで成り立っている。模擬授業後、瞬時に表示される学生相互の評価結果を基に協議することで授業協議が深まるだけでなく、それらを学生主体で行うことで、アクティブラーニングになったと報告している。

また、高橋ら(2017)は、スマートフォンのビデオ機能やSNS(LINE)を用いて、班内で交代して算数科の導入場面の5分間の模擬授業を教師役・児童役・撮影役に分かれて実施した。学生が撮影した動画を受講者全員が参加するLINEのグループ内に投稿し、先生役と児童役のコメントをLINEに投稿することで、回数を重ねるごとに模擬授業に対する学生の自信と理解が高まったアンケート結果を示している。

さらに、芥川ら(2017)は、授業リフレクションアプローチを提案し、国語の授業において指導案作成の教材研究から始まり、代表者が教師役となって模擬授業を実施し、授業後に集団リフレクションを行う。後日、教師役と授業映像を見ながら、大学教員とゼミ生が集団リフレクションを行い、自由記述による自己リフレクションも行う。これらの集団リフレクションを繰り返すことで、少しずつ「教師の発言、しぐさ」など、実践的な知識に関わる記述や考えが増加したと報告している。

以上3例を挙げたが、これ以外にも全国の教員養成大学において、多くの模擬授業が工夫されている。

しかし、いくつかの課題もある。

1つ目に、多くの実践例は履修学生の数から全員に模擬授業の教師役をさせることができず、代表のみが教師役となり、他の学生は児童役で終わっている。特に教育実習前の教科教育法において、実際に教師役として模擬授業をするのと、児童役で模擬授業に参加するのでは非常に大きな違いがある。教科教育法は複数あるため、例えば、理科の模擬授業で教師役をしなくても理科以外の教科教育法で模擬授業の教師役を体験すればよいとも考えられる。しかし、例えば、理科と国語では教科の本質も違い、授業の進め方も違いがある。教育実習で実際に児童を前に授業をする場合の事前に模擬授業で教師役を一度でも経験したことが自信につながると考えられる。そのため、各教科教育法で履修学生全員に教師役を体験させたい。ところが、50人近くの履修学生全員に模擬授業の教師役をすることは15コマの授業では無理がある。

そこで、45分間の模擬授業をするのではなく、導入の部分に絞って模擬授業をする取り組みもされている。この点については、小学校は45分授業なので、45分間の授業を体験させることが大切であるという声も聞く。履修学生全員が教師役を体験させるのか、一部の学生に45分間の授業をさせるのかでは、仮に導入の15分間の授業でも全員に教師役で模擬授業を体験させたいと考える。特に理科の場合は、事象提示から本時の問題作りの部分は、本時として児童が主体的に学習に向かうかどうかの要であると考えられる。児童が自ら見つけた問題であればその後の実験や観察・結果や考察などでも主体的に学習できるからであると考えられる。しかし、全員か45分間かについては本研究では検証を行っていないので、今後、考えていきたい。

2つ目に、班ごとの模擬授業の場合は、その授業を見た学生も限られてくるため、多様な意見が出にくいことが考えられる。その解消として、動画を撮影し、それを見合うことで多様な意見を出そうとする実践もあるが、実際に授業を見るのと、動画で授業を見るのでは臨場感が大きく違ってくる。また、動画は撮影者の視点で見なければならぬため、多面的な視点で授業を見ることには限界もあると思われる。さらに、小学校の学級は30人程度であるため、その程度人数の児童役は必要であり、数人の児童役

を相手に授業を行うのとは緊張感も違ってくる。これらのことから、班ごとの少人数相手に模擬授業をするのではなく、教育法履修学生全員の前で模擬授業をさせたい。

3つ目に模擬授業後の協議である。芥川ら(2017)は授業後の集団リフレクションを複数回行うことで「学校現場での校内研究における同僚性の構築の基礎へとつなげたい」としている。教育現場での授業研究会における授業後の研究討議を想定して、模擬授業後の討議を行うことは大切であると考え。しかし、ここでも、班ごとの意見交流では多様な意見は出にくく、その後の動画視聴による討議では十分な討議ができるとは考えにくい。そこで、授業後の討議においても履修学生全員による、教育現場の授業研究会を想定した討議を学生主体で実施することでアクティブになるだけでなく、教育実習や教育現場に出たときに生きてくると考えられる。

以上ことより、班ごとの模擬授業は15コマの教科教育法で模擬授業を行うための苦肉の策であると考えられ、効果的な模擬授業とは考えにくい。

3. 目的

本研究では、教員養成課程における教科教育法において履修学生全員が具体的な授業場面を想定した授業設計を行うことができるために、アクティブラーニングとしての模擬授業について提案することを目的とする。

4. 研究(実践)の方法

2016年度後期科目「理科教育法」は、変則的で例年は1学年のみが履修することになっているが、この年度のみ2年と3年の53名が履修した。本学は3年の9月に教育実習に行くため、2年生は教育実習前で、3年生は教育実習後の履修となった。

15コマの前半は、理科指導法の理論や指導案作成とし、後半を模擬授業として位置づけ、下記のように実践した。

- ① 53名の履修生を5つの班に分け、必ず班内で話し合い、班で教材研究、児童役、模擬授業の練習など協働学修として授業を作りあげる。

なお、同じ班内ではできる限り模擬授業の学年

に偏らないようにする。どうしても同じ学年になったときは違う単元で実施する。さらに、5つの班を超えて、同じ学年の模擬授業をする同士で別の班を作り、教材研究と指導案作りはその学年別の班で協働学修をする。

- ② 全員が一人15分程度の模擬授業行う。15分は導入部分で、(前時の復習)・事象提示・課題作り・予想・実験観察の見通し等を行う。
- ③ 授業後は、司会者を決めて学生中心に授業反省会(授業研究会)を行う。なお、授業研究会は下記の要領で進める。
 - ・授業者の反省
 - ・授業者への質問
 - ・質疑応答
 - ・大学指導教員からの助言
- ④ 授業者以外の児童役の学生全員が、授業者に対して「授業者に学びたい点」「改善点」をコメントカードに書き、指導教員点検後に授業者に渡す。
- ⑤ 模擬授業はビデオに撮影し、最終回に各学生にDVDとして配布する。
- ⑥ 学生は配布されたDVDを見て、感想、良かった点、課題点を最終レポートとして提出する。
- ⑦ その他、本学では小学校の教室を想定した教室はなく、全てホワイトボードの教室であるため、チョークが使えるようにするため、図2のように移動式黒板を2枚並べて黒板代わりとした。



図2 移動黒板による板書

さらに、図3のように電子黒板を必修とし15分間のどこかで必ず使用するようにした。電子黒板の使用形態は特に指定せず、自由に使用させた。また、電子黒板の使い方の説明は授業内では一切せず、取扱説明書を学生も利用できる学内サーバーに上げ、各自で取扱説明書も参考にしながら学生同士で使い方を教え合わせた。

また、機器も含めた当日の授業の準備は班内で協力し合って取り組ませた。



図3 電子黒板の活用

5. 結果と考察

1コマ3人ずつの模擬授業であったが、指導教員は動画撮影と授業研究会での指導のみで、事前の準備から授業後の反省会まで全て学生主体で進められた。

1) 授業後のアンケート結果

授業後のアンケートは2017年9月に実施し、2年生は教育実習中のアンケートとなった。授業実施後約1年経過してからの実施のため、回答者数は20人(37.7%)に留まった。回答学年は3年生が9人、4年生が10人、学年不明(無回答)が1人であった。

結果は下記の通りである。なお、アンケートは放送大学が提供するWebアンケート「リアルタイム評価支援システム」(REAS)を使用した。

①「理科教育法」を受講して、受講前より理科の授業の進め方が分かるようになりましたか。

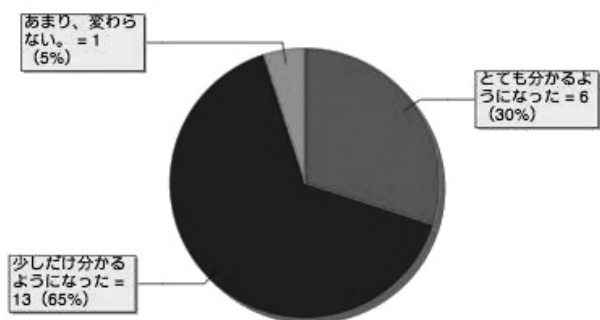


図4 受講前より理科の授業の進め方が分かるようになったか

図4のように、「とでも分かるようになった」と「少しだけ分かるようになった」で95%になった。あく

まで大学生相手の模擬授業であるため、とても分かるようになったとの回答は3割であった。

②自分がやる理科の模擬授業の回数についてはどうでしたか。

図5のように、「一人2回はやりたい」と回答した者が6割おり、今回の1回の模擬授業では物足りないと考えている者が多い。それだけ、模擬授業の必要性を感じていることが分かる。なお、一昨年は履修学生が20人弱であったため、一人2回の模擬授業を実施していた。

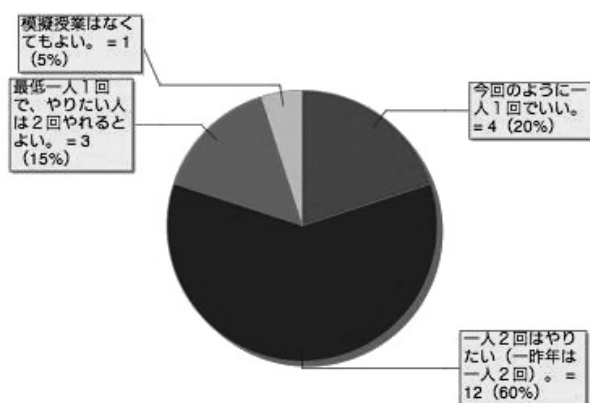


図5 模擬授業の回数についてはどうか

③理科の模擬授業をするとき、何が大変でしたか。(複数回答可)

図6のように、75%の者が「発問の仕方」を大変であったと回答した。次いで「児童役発言をどう授業に取り入れるか」が多く、模擬授業を進めること自体に大変さを感じている。

授業後の授業研究会で仲間や教員から何と言われるかについては大変だと回答した学生は何れも3名で、授業後の授業研究会はむしろ勉強になるなどの好意的に感じている学生が多かった。

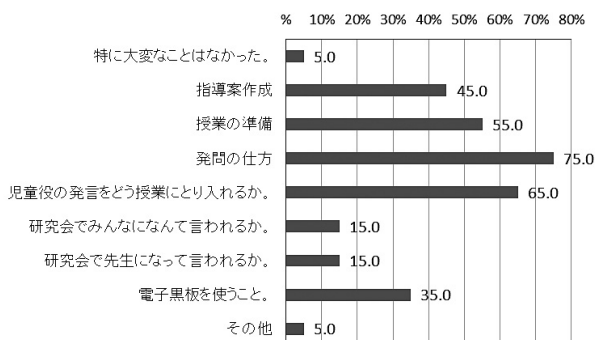


図6 模擬授業をするとき、何が大変だったか

④模擬授業で電子黒板を使わなくてはならないことについてどう思いましたか。

今回、模擬講義に必ず電子黒板を使用することにしたが、「強制的だったが、おかげで使い方が分かって良かった」と回答する者が4割、「使いたい人だけ使えば良い」が3.5割であった。「電子黒板は模擬授業に必要ない」と回答する者はおらず、学生は、電子黒板の必要性を感じていると考えられる。ただ、電子黒板の使用を自由にすると使わない者が多くなる可能性があり、全く電子黒板を使わずに教育実習等に出ることを考えると、ある程度の強制力は必要ではないかと考える。しかし、本来は授業によって電子黒板が必要であるかどうかは考える必要はあるため、使いたい人だけ使えば良いという回答も理解できる。

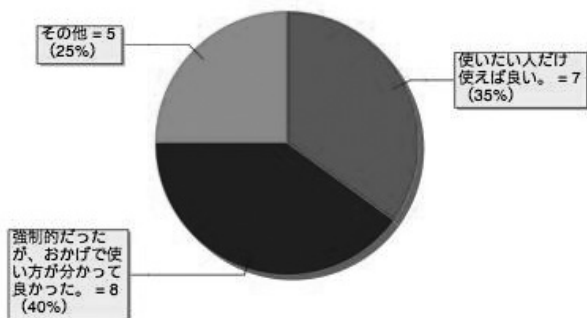


図7 電子黒板を使わなくてはならないことについてどう思うか

⑤小学校3年以上の担任になったとすると、自分で理科の授業をしますか。

6割の学生が「ぜひ（自分で理科の授業を）やりたい」と回答している。もともと、理科が苦手な学生が多い中、理科教育法によってある程度の自信をつけた学生がいることが分かる。

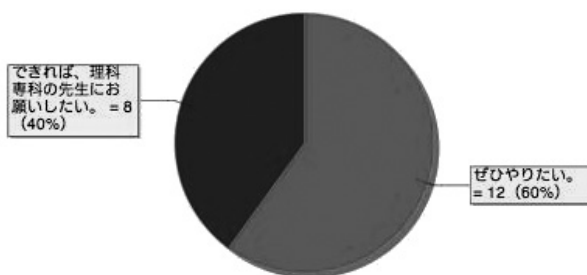


図8 担任になったら自分で理科の授業をするか

2) 自分の模擬授業の動画を視聴しての最終レポート
最終レポートの時期を同じにするため、撮影した動画のDVDはその都度配布せず、最終回で配布し

た。最終回に模擬授業をした学生には、その日のうちに YouTube に限定公開し、URL を学生に知らせた。レポート課題の題目は、

- ①自分の模擬授業の動画を見た率直な感想
- ②良かった点（今後さらに伸ばしたい点）
- ③課題点（今後、改良すべき点）

の3観点で書かせ、授業後の研究会や仲間からの「授業者に学びたい点」「改善点」のコメントカード、指導教員の助言も参考に書かせた。学生の最終レポートの一部を以下に載せる。

①自分の模擬授業の動画を見た率直な感想

自分の授業を、客観的に映像で見たのは初めてだった為、少し抵抗があった。しかし、自分でやっているだけでは気づくことのできない点に気づくことができ、映像を見ることは、良いと思った。

話し方がゆったりしていて、めりはりが無いと思った。話し方もごこちないため、慣れなければならない。実際の児童の前ではない分、緊張したが、どんな時でも、堂々と授業をできるようにしたいと思う。

自分の不安が児童役にも伝わったため、児童も元気がなく、静かな授業になってしまったのではないかと思う。

自分の模擬授業を動画で振り返るという反省方法は初めてだったので、見るまでにはかなりの心の準備が必要だった。いざ見てみると、普段の自分ではないような表情や話し方をしている、人の前に出た時ならではの姿で立っているなど思った。緊張していたので、余分な動きが多かったり、話がうまく流れていなかったところがあったりしたが、自分自身とても気になった。模擬授業をしている最中は、とにかく無事にやり切ることを頭において、最大の緊張感の中やっていたけれど、こうやって動画で見直してみたら、あの時もっとこうしたらよかったなど、改善点がいっぱい出てきて、どれだけ準備しても模擬授業で納得のいく授業をするのはやっぱり難しいと感じた。また、始めは動画を見るのがどちらかという嫌だったけど、今回動画を見て模擬授業を振り返って気付くことがたくさんあったので、他の教科の模擬授業でもできたら取り入れてほしいと思った。

私が授業をしているのを見てまず思ったことは、自分の授業を「授業を受ける立場」から見る。「客観的」に見るということはとても大切であるということを感じた。

なぜなら、今回山崎先生に私の模擬授業をしているところを撮っていただいて、改善すべき点や課題点が多く見つかったからである。

終わったと、「自分の授業は完璧ではなかった」という意識はあったものの、いざ自分の目で授業風景を見てみると、さらに具体的な課題が浮き彫りとなって、まだまだ自分は力不足ではあるが、「良い授業」にぐっと近づいている気がした。

どの学生も自分の授業を自分で動画によって客観的に見ることは初めてであり、動画を見ること自体に抵抗を感じる学生は少なからずいた。しかし、動画で自分の授業を客観的に見ることによって、授業後の研究会での仲間の指摘されたことや指導教員からの助言を、より具体的に捉えることができたことと捉える学生が多かった。

②良かった点（今後さらに伸ばしたい点）

教師役学生の声の大きさや表情などは、研究会等で指摘されてもなかなか学生には具体的には伝わらない。さらに、板書の文字なども授業後に直ぐに見直す余裕がない場合が多い。そのため、自分の授業の動画で確認することで具体的にチェックすることができている。

授業を行っている時から意識していたこともあり明るく元気に授業をやろうと思い進めていたので、自分の表情が豊かだったことや、声の大きさを児童が聞こえるようなボリュームで話すことができていたと思う。また授業がスムーズに進むように、途切れないように教師が話す時間や問いかける時間、児童が発言する時間を多く作ることで意見が活発になるように多く問いかけをしていたなど感じた。他に具体的に言うと、ワークシートを配っているときに、「すごいね、この列！静かに待ってるね」や「〇〇ちゃん良い姿勢だね！」などと具体的な声掛けができていたと思って、そのような声掛けをすることで児童にやる気を起こさせることに繋がると思うし、自分もしっかりしようという児童に向上心に繋がると思った。そのため児童が授業を受けたいと思えるような工夫した声掛けをすることが大切なのだと思う。また、実際に良いのかはわからないけれど児童が発言をした後にまた全体の児童が分かりやすい言葉に言い換えて説明をしていたことでクラス全体がしっかりと一緒のペースで理解することができるのだと思う。また、児童が前に出てきて電子黒板を使い影に丸を打つときに、「これは何の影ですか？」と児童に説明されることで、その児童自身も理解しているのかがわかるし、周りの児童も何の影なのかということがわかり良かったと思う。

教材を児童の親しみやすいものを使ったこと、板書の字が見えるかどうかの確認を行ったこと、板書の字を大きく書いたことの3つだと思った。

1つ目の教材を親しみやすいものにしたところでは、児童の目線で見えた模擬授業ではドラえもんが出てくるということに対して知っているものが授業中に登場してきたことに対する嬉しさと、これから授業で何をやるんだらうとワクワクさせる意味で良かったと思った。

2つ目の板書の字が見えるかどうかの確認を行ったことでは、自分でこれを言った覚えはなかったけれど実際の授業でも絶対に聞かなければいけないと感じた。児童から見ると確認をしてくれたことは嬉しいし、親切に感じるものだし、教員の目線から見ても大丈夫だということが分かるのでお互いのメリットにもなると思った。（後段に続く）

これは今後からは意識して続けていきたいと感じた。

3つ目の板書の字の大きさについて。実はこの模擬授業が終わってから自分の板書の文字が大きすぎるのではないかと感じ、板書を小さく書くように練習を続けていた。でも動画で見るとそこまで大きすぎると感じることはなかったし、逆に後ろの席の人にまで見えやすくて良いのではないかと感じるほどだった。それに実際の小学校の板書はもっと大きいので模擬授業と同じくらいの大きさの方が良いと自分の中で感じた。

今回の模擬授業を動画で見て一番驚いたのがこれで、意外とうまくいこともあるのかなと感じた。

最初から最後まで無表情にならずに笑顔でやり遂げられていたところ。自分で実際に授業を進めているときは、どんな表情になっているのかわからなかったけど、ビデオをみてこんな表情をしているのだなと思いました。先生の表情や雰囲気は子どもたちの安心感や気持ちの面にかかわってくるので、自分のこういうところはこれからも忘れずに大切にしていきたいと思いました。

字の大きさ自分の中で、文字の大きさはどこに座っている子どもにも見えやすいように意識しながら書いていたので大きめの字で書いていました。黒板の文字は子どもたちが授業を受けるうえで大切なものです。これも続けていきたいと思いました。

③課題点（今後、改良すべき点）

自分で、今後の一番の課題だと思ったのは、テンポよく進めようとするあまり、落ち着きがなく、自分のペースでどんどんと次の展開に切り替えてしまっていたところである。教師側が発問で授業の流れを変えたりすることも大切だと思う。しかし、自分の場合、一問一答が続いてしまったり、児童が自由に発言できる時間が少なかったりと、授業がきれいに進んでいるように見えて、実は、児童の考えや思ったことが反映されていなかったのではないかと感じた。評価プリントでは、特に先輩方が、「児童が主体的に発言をし、それを授業の進行にいかせるような働きかけをするとよい」などという意見を書いてくださったが、自分で模擬授業の動画を見て、確かに自分がたくさん話しているなど感じた。

また、自分が児童に言ってほしいことが出なかったときに、無意識に自分の言葉で言ってしまっていたり、予想を発表する場面では、児童が言ったことをまとめて話したりしてしまった。これらをまとめて、今回自分は、授業をうまく進めようとしすぎていて、教師と児童のやり取り、特に、児童が自由に発言できる場を大切にできていなかったため、これからの模擬授業は、発問のしかた、児童の発言の受け止め方に注意しながらやりたいと思う。

最後に、「大きな声でハキハキと話せた」ことを、良かったところの反省の一つに挙げたが、中には、全部が全部大きな声を出すのではなくて、大切などころだけ特に絞って大きな声で話すようにすると、声の強弱があつてさらに良いのではないかとという意見があつた。自分自身とても納得したし、それに付け加えて、表情も話す内容に伴って変わると面白いと思ったので、これからの模擬授業で試してみたいと思う。

研究会で3年の学生が自分の実習経験から話した児童の主體的な発言を授業に活かす工夫について、研究会時には分かったつもりであっても、動画で客観的に見直すことで、教師役の話しすぎることなど児童に自由に話させる場が少なかったことなどが具体的に理解できている。

模擬授業をやってみて感じたことは、模擬授業をとりあえずやらなくちゃという感じがした。必死にやるだけみたいになっていったと思った。特にそう思ったのは、緊張しているからと言って声や目線がおろそかになってはいけなさと感じ、ビデオを見て思ったことが、黒板の方に目線がいったり、教科書を見ながら話をしたりする場面が多かった。これでは、教育実習にいたときにやってしまうと、児童が、「自分たちには興味がないのか」ということを感じてしまうなと思った。

板書では、字を丁寧に書くことを意識したから、だんだん小さくなっていった。視力の悪い子や後ろに座っている子は、板書が見づらく、ノートの板書が遅れたりすると思った。一定の大きさと書くことや丁寧に書くことができるように黒板で書く練習をしたいと思った。貼物の準備をすることもすると、問いたいことは最初から決まっているから貼物として準備しておけば、黒板に書く手間や大きく書いたりもできて児童は見やすいと思った。

貼物があると課題に使いたり、まとめに使いたりすることもあった。無理に板書を書くばかりではなく、くわしく児童に説明させたりして、キーワードなどを板書することもできると思った。

発問をするときは、児童に何を伝えたいのか、授業を楽しいと思わせるにはどうしたらよいかを事前にかんがえておいたり、児童が興味を引くようなものだったり、発問だったりすると児童から問題が出てきたりして、

やってみよう、やりたいにつながると思った。そうすれば、自分が今回やりたい内容が児童にとっても、やりたいことにつながるし押し付けにならないと思った。

貼物もそうだが、電子黒板の準備もおこたってはならないと思った。今回もトラブルがあったように準備をちゃんとしておけば、児童を待たせることもなかったし、授業事態もスムーズにいったのでないかと思った。電子黒板は児童の興味を引く機械だと思うから使ったあとは、電源を消して、児童の興味を黒板や自分に向けてやるべきだと思った。今回の模擬授業では、準備不足や練習不足など模擬授業だからと思ってやっていたはいけなし、失敗をおそれずになにごともチャレンジしていきたいと思った。

教師役学生は、緊張感で授業をこなすことに精一杯になっている。授業が終わってからの研究会においてもその緊張感が残り、仲間からや担当教員からの助言を聞いても十分に理解できない場合が多いが、動画でじっくり確認することで細部にわたって具体的にリフレクションすることができるようになったことが最終レポートからも読み取れる。

6. まとめと今後の課題

全員が教師役をこなし、アクティブラーニングとしての模擬授業を実施してきた。理科教育法で後半の模擬授業になると、授業準備から授業開始、授業後の授業研究会など全て学生主体で進められ、指導教員は動画撮影と授業研究会での指導助言等を話すだけになった。また、授業研究会では学生の発言が多く、時間内に学生が発言しきれないことも何度かあった。児童役の学生にとって、50人ほどの模擬授業を見ることになったが、最後の方までモチベーションがあまり下がらず実施することができた。

さらに、授業後に教師役学生に授業の動画を配布して最終レポートを書かせることで、自分の授業を客観的に見直し、自分では気付かなかったことや授業研究会で指摘されたことが具体的に理解できたレポートがほとんどであった。そのため、授業研究会や授業感想コメントカードで指摘されたことがより効果的に理解することができ、自己リフレクションをすることができたと考えられる。

課題点については、1つ目に、協働学修として班で指導案作成や教材作成・授業の練習などを授業外で取り寄せたが、授業外での学生の都合が合わないなどから、教材研究等は個人で行うことが多く、授業の練習も家族を相手に練習するといった学生もいた。特に模擬授業は練習なしで当日実施するのではなく、事前に何度か練習させるためには、ある程度の時間を保証する必要がある。

2つ目に、一人15分間の授業であっても準備や授業後の研究会などを含めると、1コマで3人の模擬授業が精一杯であった。そのため、15コマの授業では全員の授業をこなすことができず、理科教育法以外の授業（授業実践演習）も使って模擬授業をすることになった。2016年度は変則的で2学年合同で授業を実施したが、次年度以降は1学年で20人程度となるため15コマで実施可能の見込みである。

引用文献

芥川元喜, 澤本和子 (2017), 教職志望の大学生のための「授業リフレクションアプローチ」の開発, 日本教育工学会 第33回全国大会 講演論文集, 811-812

文部科学省(2016), 平成26年度の大学における教育内容等の改革状況について, http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/__icsFiles/afieldfile/2017/09/06/1380019_1.pdf (2017.9.23 最終確認)

文部科学省(2017), 教職課程コアカリキュラム(案), 教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/126/shiryo/__icsFiles/afieldfile/2017/07/25/1388304_3_2.pdf (2017.9.23 最終確認)

中山 迅, 山本智一 (2017), 模擬授業の事後検討会に Web 評価システムを導入した学生主体の教員養成授業, 日本科学教育学会年会論文集 41, 377-378

高橋 純, 佐藤和紀, 大村龍太郎, 上坂三希子(2017), 教員養成段階における汎用の SNS を活用した模擬授業演習の試み, 日本教育工学会 第33回全国大会 講演論文集, 791-792